

福井絹業の研究

— 福井絹業の成立とそれの日本資本主義成立における意味 —

菱谷政種

A Study of Textile Trade in Fukui Prefecture

— Realization of textile trade in Fukui Prefecture
and this meaning on realization of capitalism in Japan —

Masatane HISHITANI

This report is a study of realization of textile trade in Fukui Prefecture. Moritaro Yamada has studied “Realization of Capitalism in Japan.” He discussed in his work that there is two types of turning of production in the Meiji Restoration.

The one is the type of silk-reeling industry and textile trade, the other is that of ceramic industry and brewing industry. And the type of silk-reeling industry and textile trade is important factor as the foundation of turning of production in the Meiji Restoration. In this meaning, realization of textile trade in Fukui Prefecture has rendered services to the realization of capitalism in Japan.

1. 福井絹業の成立

福井絹業については、すでに、多くの研究者によって、研究がなされている。⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾たとえば、印牧邦雄氏⁽⁷⁾は、その著「福井県の歴史」（県史シリーズ18・山川出版社）において「絹業の躍進」の項において、次のごとく述べられている。

「明治初年における福井県工産物生産のなかでは、とくに釘、鋌、鎌などの生産が全国的にもっとも高い地位を占めていたが、明治中期から大正期にかけて飛躍的に発展をとげたのは絹織物業（羽二重機業）であった。もともと福井県は著名な織物業地帯でも生糸産地でもなかった。

それでは福井県の絹織物業がいつごろから飛躍的発展をとげるのだろうか。それについて主要絹織物（反物）生産の年次変化を追ってみよう。明治19年より22年までの4カ年の平均をみると、旧産地の多くが4～5%を占めるなかで、福井県は3.6%にすぎなかった。そのように明治20年代前半においてきわめて微々たるものでしかなかったのが、33年から37年にいたる5年間に京都を引きはなして24%となり（石川8% 富山3%）先進地帯を凌駕するほどの発展を示すにいたった。」（同書228頁参照）

「明治4年、由利公正が欧米視察から帰り、ヨーロッパ各国で求めた絹織物の見本を福井の有

志に見せ、これを範として立派な織物を作って産業を興すべきだと督励した。有志の一人、蚕業家酒井功は、ヨーロッパではボタン機という新しい機械でこのようなすばらしい絹織物が織られることを知った。酒井は京都にボタン工場のあることを聞き、技術導入のために敦賀県に機業伝習性の派遣を願い出て、明治8年に許可された。

明治8年、県では、ボタン機の構造と運転を橋本多仲、製織の法を細井ジュン^⑧に学ばせることにし、翌年京都に派遣した。その直後、敦賀県が廃されたため県費支給が打ち切れ、修業半ばで帰郷を余儀なくされた。しかし彼等の習得した技術は、10年3月福井の東本願寺別院の境内で開かれた勸業博覧会で披露され、2台のボタン機が織りなす絹布の見事さに、集まった見物人は驚嘆した。これが刺激となって、同年4月、酒井功・村野近良ら士族を含めた14人で福井毛矢町にボタン機10台の織工会社（士族マニユ）を興し、細井ジュンは織工教師として、織工の指導に当たった。こうして初の機業会社が発足したのである。綾織ハンカチーフ地と洋傘生地が生産品であったが、まだ技術が未熟な上、販路もなかったため、会社の幹部が製品を背負って京浜、阪神、名古屋、金沢などへ売り歩いた。こうした努力が実って、次第に越前傘地、越前ハンカチーフ地の名が全国市場で知られるようになった。」（同前掲書 230頁参照）

「明治13年経営問題から織工会社を退社した有志が福井の御泉水町に精織社を興し、その後つぎつぎと新しい機業家が誕生した。17年織工会社にジャカード式織機が導入され、紋織ハンカチーフ地などが織られた。明治18年には尺3寸幅ハンカチーフが海を越えて、印度に輸出され、これが越前製絹の外国直輸出の嚆矢となった。その後、横浜の貿易商社にも売込みが成功するなど、輸出絹織物産地としての足固めが次第に形成されていった。明治17年、生糸商人山口喜平が商用で横浜に出て、五十番館主メンデルゾンに会ったところ、生糸を扱うよりは当時桐生より売り出されている羽二重を織り出し、輸出をした方がよいのではないかと勧められた。彼は帰国後大聖寺町の機屋で織らせ、京都に出して精練させたが、品質が桐生の品に及ばなかった。

明治18年の冬、例の織工会社へ横浜の小林清作商店（今立郡出身）からアメリカ向け輸出用羽二重の注文があった。ところが織工会社では、まだ羽二重製織の技術を知らなかった。これを聞いた村野文次郎は、関東の座繰製糸の視察に赴いた折、桐生に立ち寄り、知人の機業家森山芳平に技術伝習方を頼んだところ、羽二重製織技術の教師として同工場の技師高力直寛を推薦された。20年、高力を福井に迎え、30名の機業家の合議により、150台の織機1台あたり15銭を徴し、各工場から2名の工女を出席させて、約3週間講習を受けた。福井特産物羽二重織物はこうして時代の花形として登場した^⑨。

羽二重生産は湿潤な気候に適する。年中昼夜を問わず緯糸を湿らせて（これを湿緯^{しめよこ}という）織らないと良い地肌のものができない。桐生のように赤城おろしのカラッ風地帯よりもはるかに優れた自然条件と安い労働力とが結びついて、先進地を抜いて福井が新しい産地として成長していった。

明治20年代の前半はまだ生産も微々たるものであったが、25年頃から商況が活発になるとともに機業家が増加し、福井では日々50台の織機が新調されたといわれる^⑩。同年の織機8,400台

従業者1,600余名を数えた。そして機業熱は福井から隣接郡部へ普及していった。福井機業の20年以後の急速な普及発展、40年代の急速な動力化は、このような小地主層に担われて進展した⁹⁰。製品はハンカチーフ程度の小さなものから疋物へと移行し、品度も向上して輸出が増えた。海外の博覧会に出品すれば優秀な成績を収めた。29年、羽二重はますます隆盛の兆が見られるようになり、日露戦争後の好況、そして第一次大戦の勃発が羽二重の大躍進をもたらした。大戦の始まった大正3年 生産額が約3,000万円に過ぎなかったが、大正8年には1億7,000万円の巨額にのぼり、全国輸出額の60%を占めた。これは大戦後、アメリカの戦後景気によって羽二重輸出が膨脹したためであった。

明治37年、県工業試験場が5台の力織機を導入し、研究に力を入れたが、その頃一般には手織機が使用されており、力織機はまだ普及していなかった。39年横浜から日本製の力織機が導入されて以来、民間に普及しはじめる。40年には295台でこれは全織機の7.3%であったが、以後急速に増加して、その比率は44年に23.1% 大正3年51.9%を占めた。明治40年代は動力化の時期であるが、その後も動力化は進展し、福井県機業の地位を確固たらしめた。」(同書232頁参照)

2. 日本資本主義成立過程における福井絹業成立の意義

前述したように、福井県は著名な織物業地帯でもなければ生糸産地でもなかった。明治20年前半においてはきわめて微々たる存在に過ぎなかった福井県が前述の大きな発展を遂げた真の理由は何であったか。本項では、日本資本主義成立の角度より検討を加える。

山田盛太郎「日本資本主義分析 ― 日本資本主義における再生産過程把握 ―」(岩波書店 昭和9年 昭和24年改版⁹¹)には、つぎの記述がある。

「産業部門における生産旋回の形態が、それぞれの差異を示し、第一の型としての、製糸業及び織物業の場合における生産旋回の形態と、第二の型としての、窯業及び醸造業の場合における生産旋回の形態とは著しく相異し、第一の型においては、維新前創業の工場数極めて少なく、維新後に至りてその躍進的激増を遂げ、これに反して、第二の型においては、維新前創業の工場数極めて多く、維新前創業の全工場数の過半を占むものが、維新後に至りてその停滞的跛行を示し、第一の型と第二の型とは正に逆の関係に立つこと明瞭である。

第一の型、即ち、製糸業及び織物業の場合の生産旋回の形態。その意義について。維新変革の際における、軍事機構＝鍵やく産業の強靱な統一性を旋回軸とする所の、生産旋回の基調が畢竟は衣料生産に、即ち、(1)半隷農的零細耕作農民の土壤に輸出産業として生育した製糸業 (2)半隷農的零細耕作農民に問屋制度的家内工業として寄生した所の、伝統の絹織業と新興の綿織業とを包含する織物業。及び半隷農的零細耕作農民から流出する半隷奴的賃金労働者に依拠する紡績業。以上の三者を基準とする所の、衣料生産に、それがおかれたこと明瞭であり、茲に、日本資本主義が半隷農的零細耕作農民及び半隷奴的賃金労働者に立脚する型相を看取すべきである。

次に、第二の型、即ち、窯業及び醸造業の場合の生産旋回の形態、その意義について。(1)窯業の場合の停滞的跛行性は、伝統の陶器業における、維新変革の際の需要激変に伴う雅作品凋落に

基因し、それが輸出陶器業として再編成せられるに至る迄の渋滞性を示すものであって、前出の装剣具彫刻工の場合もこれと同型である。(2)醸造業の場合の維新後の跛行性は、それ自体よりもむしろ維新前における、その圧倒的・優越性の方へ力点がおかるべきものであって、かかる醸造業はもっとも古き、生粋の土産的、土着的、地主的性質をもつもので、これこそは、徳川封建制下に蟠居せし零細耕作農奴寄食の高利貸資本、寄生地主の屈強な一支点なりしことを看取すべきである。」(同書9～10頁)

つぎに、生産旋回と再生産軌道との連繫について、つぎのように述べられている。

「維新変革の際における、軍事機構＝鍵やく産業の強靱な統一性を旋回軸とする所の、生産旋回は、日本資本主義発達における産業資本の確立を規定する。総じて、産業資本の確立は、一般的には生産手段生産部門と消費資料生産部門との総括に表現せられる社会的総資本の、それ自体の本格的な意味での再生産軌道への定置によって示され、特殊的には、衣料生産の量的及び質的な発展を前提条件とする所の、労働手段生産の見透しの確立によって示される。かかる確立の時期を、日本においては、ほぼ明治30年乃至40年の頃と推断しうる所である。蓋し、第一に。衣料生産における二大副次部門、即ち(1)棉作、紡績、綿織の三分化工程を貫く綿業と、(2)養蚕、製糸、絹織の三分化工程を貫く絹業と、以上の二系列の原料取得から加工精製に至る迄の諸分化工程を基準とする衣料生産における生産旋回＝編成替へは、30年前後には一応の展開を遂げる。第二に。労働手段生産の見透しの確立は、その素材たる鉄の確保とその製造技術の成立とを所要するのであるが、それについて、①鉄の確保は、日清の役を機縁とする大冶鉄確保＝八幡製鉄所設立と日露の役を機縁とする満州鉄確保＝鞍山製鉄所設立とによって実現し、②技術の成立は、一般には、右の両役を通じて世界的水準を凌駕した所の、綜合工業としての造船＝製艦技術によって、又、厳密な意味においては、機械を造る機械たる工作機械の、生産指標としての、旋盤の完全製作(38年)によって、解決されている。さきの推測は、この根拠に基づく。右のうち、第一の、衣料生産における生産旋回＝編成替への過程は、半隷農的零細耕作農民及び半隷奴的賃金労働者を資本の制縛下に再編成する過程として、従って、高率な半隷農的小作料と低廉な半隷奴的労働賃金との二重関係を同時に創出する所の過程として現われ、第二の、労働手段生産見透しの確立過程は、中国に対する軍事発動の過程として、従って、日本での産業資本確立と帝国主義化との二重関係を同時に創出する所の過程として現われる。ここに、産業資本確立の過程を貫徹するところの、日本資本主義の軍事的性質を把握すべきである。」(同書10～12頁参照)

福井県絹業が日本資本主義成立の一つの環として機能したことは、以上より明らかであろう。

3. 福井絹業成立の過程的特色

まず次表を参照されたい。

(明 治 32 年)	器械機数(台)	手織機数(台)	器械機数の手織機数に対する割合
西陣中心の京都府の場合	1,798	28,035	6%
桐生中心の群馬県の場合	1,785	36,701	4%
新興羽二重の本場、福井県の場合	12,093	7,568	160%

この表は、前掲山田盛太郎氏の著書より引用したものである。(P44より引用)

さてこの表は、絹織業における編制上の型相であり、(1)内地向絹織地方の型で、その典型的な事例は、西陣、桐生であって、そこでは手織機本位にある。(2)輸出向絹織地方の型で、その典型的な事例は、福井・石川等で、器械機数は手織機数を上回る。福井が後進であり乍ら、新技術吸収者として現われた事情は、その起点にすでに示されている。横井時冬「日本工業史」によると、「20年群馬県桐生より高力直寛¹³⁾を聘し、輸出羽二重を伝習せしむ。当時桐生地方にては、羽二重を織るに在来の織機を用ひしも、福井県にては、これまで使用せしボタン織機を以て羽二重織を修業したるに、かえって好結果を得たり」とある。かくて福井・石川では輸出向絹織物の産地として発展し、産業資本確立の一翼を担ったのである¹³⁾。

4. 福井絹業の衰退と福井人絹織物業の勃興

さて、福井絹業は、昭和4年10月、ニューヨークのウォール街の株式の大暴落を契機として起った生糸価格の暴落、横浜・神戸における生糸・織物の滞貨の発生から、衰退を辿り、破産する者が続出し、羽二重の繁栄再来は全く不可能となったといわれる¹⁴⁾。そして人絹織物が羽二重にかわって登場し、福井県においても、大正5年、県工業試験場での輸入人絹糸と双糸シルケット綿糸との交織品の試織や、同9年の坂井郡丸岡町戸田政吉の人絹と生糸との交織の商品化(名古屋のデパートで好評)が行われた。これとは別に、綿織物の産地松岡、志比堺、森田方面では、大正10年人絹糸を緯(よこ)糸に応用することに成功、ついで経(たて)人絹・緯(よこ)綿織物にも成果をあげ、大正15年には経緯人絹織物へと進んだ¹⁵⁾。昭和3年10月には県下の人絹糸の消費量が975トンに達し、生糸の900トンを凌駕した。6年には、織物生産高中、絹の30%に対し、人絹は70%に達し¹⁶⁾、12年には戦前最高の生産高577百万ヤールを生産し、全国生産高の60%に達した。絹はついに20%、人絹は80%で福井の繊維産業の盤石の地盤を築いた。昭和14年には実に93,152台の織機が動いたといわれる。人絹織物がこのように短期間に大発展を遂げることができたのは、国際情勢の変化に加えて、輸出羽二重の技術が、当時の粗悪な人絹糸による製織技術の応用を容易にしたことも見逃せないといわれる¹⁷⁾。昭和4年より同20年に至る絹・人絹織物の生産高の推移を表として示す。(表4.1参照)

表4.1 絹・人絹織物の生産推移（単位：ヤール，％）

年次	絹		人絹		年次	絹		人絹	
	数量	比率	数量	比率		数量	比率	数量	比率
昭和4年	91,145	60	59,094	40	昭和11年	108,465	16	556,734	84
5	72,317	39	112,033	61	12	138,383	19	577,881	81
6	73,796	32	154,817	68	17	149,675	60	102,925	40
7	61,060	20	237,584	80	18	76,725	48	82,950	52
8	73,947	22	266,398	78	19	58,775	63	34,225	37
9	148,089	29	355,133	71	20	3,182	43	4,261	57
10	147,704	25	450,818	75					

（出所：新修福井市史772頁・原注・福井繊維産業史199頁参照）

日本資本主義成立の一環として、また産業資本確立の一翼を担った絹業であったが、人絹の進出により、大巾の後退を余儀なくされた。しかし、この人絹織物も昭和12年7月日華事変の勃発により、急速に戦時体制の影響を受け、昭和17年には人絹織物の生産高は最盛期の5分の1以下に減少、20年にはわずかに1.2%と壊滅した。（印牧前掲書241頁）

本項では、福井絹業成立の過程を文献によって明らかにし、かつこの成立が、日本資本主義の一翼を担うものであることを、山田盛太郎氏の所説をかりて明らかにすると同時に、さらにその後の展開について、軍事的性質[※]をもつ日本資本主義の敗戦による崩壊を明らかにした。

5. 今後の課題

日本資本主義成立の一翼を担って登場した福井絹業であったが、昭和4年にはじまる世界不況＝蚕糸恐慌から、人絹織物が羽二重に換って登場し、福井人絹織物業が新たに日本資本主義発展の一翼を担うことになる。米国においても、レイヨンの発明による絹織物への代替以降においては、専ら輸出生糸は靴下分野を目指して販路の開拓、変更を行うことになる。このため日本の生糸輸出高はさほど減退を示すことなくして推移した。（表5.1参照）

しかし前述した日華事変、さらには生糸の最大の消費国である米国と戦端を開くことにより、生糸の輸出市場は崩壊した。さらに戦時体制の進展により、生糸の需要は落下傘などの一部にかぎられて、桑畑は食糧畑に転換し、絹業は人絹織物業とともに壊滅した。（表5.2参照）

日本資本主義のもつ軍事的性質は、日本の敗戦により、軍事的性質を完全に抑制されて、再出発することになる。蓋し平和日本の幕明けである。福井絹業、あるいは福井人絹織物業は、この後どのような推移を辿るかについては、稿を改めて述べたい。日本資本主義が、この後どのような性格を保持しながら進展し、福井絹業、福井人絹織物業、あるいはさらにその後にあられる合繊維物業がどのように関与し乍ら、日本資本主義展開の一翼を担ってゆくことになるかに注目したい。（1990. 9. 20）

福井絹業の研究

表5.1 生糸輸出数量（単位：俵）

年次	総数	うち器械生糸	年次	総数	うち器械生糸	年次	総数	うち器械生糸
明治29年	39,189	…	大正2年	202,286	199,823	昭和5年	477,322	469,895
30	69,198	…	3	171,487	169,693	6	560,577	555,924
31	48,373	…	4	178,141	177,447	7	548,541	546,250
32	59,469	…	5	217,419	216,398	8	484,035	483,131
33	46,309	…	6	258,289	253,318	9	506,906	505,541
34	86,977	…	7	243,444	241,091	10	554,996	552,581
35	80,781	75,389	8	286,224	286,201	11	505,300	501,906
36	73,155	64,323	9	174,687	173,921	12	478,584	470,514
37	96,585	82,073	10	262,028	261,768	13	477,909	475,413
38	72,794	65,270	11	344,192	342,508	14	386,030	386,025
39	103,946	95,338	12	263,280	261,723	15	293,691	293,691
40	93,543	87,266	13	372,564	369,612	16	142,751	142,721
41	115,217	109,906	14	438,449	436,071	17	8,171	8,171
42	134,694	126,898	昭和1年	442,978	440,005	18	12,513	12,513
43	148,401	141,229	2	521,773	519,870	19	1,022	1,022
44	144,560	140,376	3	549,256	547,964	20	—	—
大正1年	171,025	168,460	4	580,950	574,849			

出所：農林省蚕糸局編集「蚕糸業要覧」（昭和28年）中央蚕糸協会発行 大蔵省日本外国貿易年報による

表5.2 耕地面積の推移（単位：ha）

年次	耕地	畑	桑畑			年次	耕地	畑	桑畑		
			総数	本畑	その他				総数	本畑	その他
昭和1年	6,080	2,961	571	494	77	昭和11年	6,085	2,868	566	515	51
2	6,078	2,948	594	517	77	12	6,098	2,880	561	510	51
3	6,085	2,937	609	536	73	13	6,078	2,870	549	500	49
4	5,897	2,704	625	553	72	14	6,079	2,869	533	486	47
5	5,915	2,711	714	646	68	15	6,077	2,870	533	487	46
6	5,954	2,742	682	592	90	16	6,056	2,853	494	477	17
7	5,992	2,772	652	581	71	17	6,028	2,829	412	383	29
8	6,028	2,803	640	567	73	18	5,982	2,805	363	336	27
9	6,037	2,819	623	529	94	19	5,843	2,726	304	281	23
10	6,058	2,839	582	515	67	20	5,345	2,358	242	210	32

注：前掲「蚕糸業要覧」農林省統計表による。

<参考付表> 世界における絹・人絹生産高（単位：100万ポンド）

年次	人 絹		絹	年次	人 絹		絹	年次	人 絹		絹
	総 数	うち長繊維			総 数	うち長繊維			総 数	うち長繊維	
1890	—	—	26	1921	48	48	65	1935	1,074	935	121
1900	2	2	38	1922	76	76	70	1936	1,321	1,021	119
1905	11	11	42	1923	103	103	88	1937	1,823	1,197	120
1910	18	18	51	1924	138	138	97	1938	1,928	998	109
1911	19	19	54	1925	185	185	104	1939	2,240	1,149	135
1912	20	20	59	1926	212	212	111	1940	2,463	1,181	130
1913	26	26	60	1927	295	295	118	1941	2,786	1,251	107
1914	20	20	49	1928	361	361	129	1942	2,649	1,197	80
1915	19	19	52	1929	442	435	135	1943	2,544	1,152	50
1916	23	23	60	1930	457	451	130	1944	2,088	1,035	30
1917	24	24	59	1931	508	500	126	1945	1,406	902	24
1918	26	26	55	1932	534	517	116				
1919	28	28	60	1933	693	665	122				
1920	33	33	49	1934	823	771	125				

(注) 前掲「蚕糸業要覧」原注：テキスタイル・オルガノン1952年6月号・1953年6月号 人絹は1922年において絹の生産を上回ることが知られる。

参考文献および注記

- 1) 福井県「福井県史. 資料編12上. 近現代3」昭和63年
- 2) 福井県「福井県史. 資料編10. 近現代1」昭和58年
- 3) 福井県「福井県史. 資料編2. 近現代2」昭和61年
- 4) 福井市「福井市史. 資料編13」昭和63年
- 5) 福井市「新修福井市史Ⅱ」昭和51年
- 6) 印牧邦雄「市町村で見る福井県の歴史」昭和61年
- 7) 同上「福井県の歴史」（県史シリーズ18）山川出版社 昭和48年
- 8) 福井新聞社「福井人物風土記」昭和48年
- 9) 山田盛太郎「日本資本主義分析—日本資本主義における再生産過程—」岩波書店 昭和9年 山田盛太郎著作集第2巻 岩波書店 昭和59年
- 10) 福井県下機業調査報告書によると、「福井市ノ如キハ大工場相接シ煙突ノ煙ハ空ヲ被フノ盛況ヲ呈シ居ルナラント然レトモ事実全ク之ト異リ總テハ家内の工業組織ニ依テ営マレ到ル処ノ街ク到ル処ノ小路到ル処ノ村リヨトシテ梭声ヲ聞カザルナキノミニシテ絶テ大工場ナルモノヲ見ル能ハザルモノナリ而シテ何故ニ如此家内の工業発達セルヤト云フニ既ニ述ベタルカ如ク同地ノ機業ナルモノハ元ト士族ノ内職タルニ過ギザリシモノカ偶々時勢ニ投シ一時ニ好況ニ赴キタルヲ以テ我モ我モト之ニ着手シ官吏タルト医者タルト八百屋タルト肴屋タルトヲ問ハズ苟モ婦女ノ住スル宅ニテハ必ス機台ヲ据付ケザルナキノ有様トナレリ元来機業タルモノハ他ノ工業ニ比スルトキハ機械ノ設備等ニ費用ヲ要スルコト誠ニ少ク唯一台ノ機具一疋分ノ生糸ヲ有シ雨露ノ漏ラザル一室アルトキハ直ニ着手シ得ルヲ以テ家内の工業ニハ最も適当ナリ機業ノ性

福井絹業の研究

質ニ於テ既ニ然リ況ンヤ當時羽二重ノ好況ニ赴クノ勢ハトウトシテ際限ナク人々唯争フテ利益ヲ得ンコトニ汲々シー人ノ奮フテ此渦中ニ立チ能ク同志ヲ糾合シ資本ノ合同ヲ計リ以テ大工場ノ設立ニ尽力スルモノナカリシニ於テヤ（福井県「福井県史資料編10近現代1 738頁参照）

- 11) 福井機業の発展が小地主層に担われたことによって経営的に良好に推移したことは、たとえば株式会社福井経済経営研究所T氏の証言するところである。
- 12) 前掲山田「日本資本主義分析」9～12頁参照。
- 13) 「太平洋戦争下の機業構成と統合状況」（福井県史資料編12上、近現代3 275～283頁）によると、昭和10年11月現在における力織機所有台数別工業者比較（福井県と群馬県）によると、5台以下が福井県3.2%に対し、群馬県17%、31台以上が福井県25%に対し、群馬県は9%に過ぎない。以て如何に福井県の機業の規模が大きいかを認め得よう。以上は力織機のための比較であるが、福井県において、かかる大規模経営が発展したのは、他方に農家副業としての手織機、足踏機を急速に駆逐したからで、昭和14年では足踏機は僅かに4台のみとなっている。これは群馬県の力織機台数の約8割にも及ぶ膨大な手織・足踏機の現存する状態と比較して著しき相異点といえよう。

＜参考付表＞ 福井県機業統計表

	製造戸数	機 台 数				職 工 数		
		力 織 機	足 踏 機	手 織 機	計	男	女	計
明治30年	2,445				13,156	228	12,820	13,048
34	2,838				19,535	245	19,271	19,516
38	2,466				19,186	975	20,623	21,598
42	2,164	1,896			21,237	780	23,713	24,493
大正2年	1,280	7,664		7,936	15,600	922	14,654	15,576
6	965	13,857	2,549	1,374	17,780	989	12,532	22,521
10	1,696	29,315	1,266	1,586	32,167	2,752	17,700	20,452
14	1,143	25,957	369	1,041	27,367	2,247	13,726	15,973
昭和4年	1,341	32,936	106	435	33,477	3,161	19,049	22,210
8	1,968	50,433	22	155	50,610	6,131	27,284	33,395
10	2,606	71,231	4	82	71,317	9,301	35,366	44,667

（資料）福井県織物同業組合「同組合創立50周年記念50年史」9頁参照

- 14) 前掲印牧「福井県の歴史」239頁参照
- 15) 前掲「新修福井市史Ⅱ」771頁参照
- 16) 福井県史資料編12上、近現代3 221～222頁によると、「人絹王国」として、昭和9年の模様について次の如く述べている。

「県織物界は海外市場からの注文殺到で大正7年時代の未曾有の好景気が再来し、全機業家はこの好況の大波に乗って一大飛躍を試み機台の増設計画相つづ。かてて加えて新規開業の機業家も今月に入って26日現在でおどろくなかれ39戸の記録的増加振りをしめし、半ケ年間にふえるべき機業家もわずかに26日間でふえるという実に前代未聞の現象。機台数のふえるに伴い自然に職工の払底をつげ、今立・吉川・大野・福井を中心の工場地帯では盛んに職工の争奪戦が演ぜられ一人の職工を周旋すると10円也が世話料として頂けるといふ嘘のような真実の話。これまで工場主は子持の職工は能率に影響すると非常にいやがってあったが、今日この頃では子持職工すらも拝む、頼むの懇願で雇い入れ」という織物の非常点景が描かれている。

- 17) 前掲印牧「福井県の歴史」240頁参照
- 18) 前掲山田「日本資本主義分析」12頁参照

＜後記＞ 本稿作成に当り、本学経営工学科卒業研究生齊藤伸行、兼子博行、齊門雅治、白木和文、堂下浩一、宮本淳一の諸君の協力を得た。記して謝意を表する。

（平成2年10月5日受理）